

日本研究のマルチ・ヒストリオグラフィー

—自立から協働の時代へ—

清水唯一郎

(慶應義塾大学総合政策学部教授)

【要約】

一口に日本研究と言っても、研究が行われる地域によって問題関心も研究対象も用いられる手法も異なる。戦後 75 年を経て、アメリカにはアメリカの、ヨーロッパにはヨーロッパの、アジアにはアジアの「日本研究」があり、それぞれが独自のヒストリオグラフィーを持っている。もちろん、日本もそうだ。そして、日本の例を見れば明らかなように、それぞれのヒストリオグラフィーが独立して発展し、相互に参照されるのは翻訳されたごく一部に限られていた。

その意味において、2018 年は日本研究の画期となった。明治 150 年の節目の年に、日本のみならずアメリカ、ヨーロッパ、アジアをはじめ、多くの地域で明治維新や日本の近代化をテーマにした国際会議が行われた。多様なヒストリオグラフィーが本格的に相互参照をはじめ、新たな可能性が生まれはじめている。そうした動きを推し進めていくためには相互交流を促進するための基盤整備を着実に継続していく必要がある。

キーワード：日本研究、日本学、国際化、国際共同研究

一 はじめに：「日本の近代」の多様性

日本の近代は、日本だけのものではない。あたり前に聞こえるかもしれないが、そのことに気づいている日本人は多くはないだろう。日本人が各国の歴史を通じて学び、考えるように、日本の近代は世界各国で学ばれ、論じられ、考える材料となっている。

興味深いのは、それぞれの国によって、学び方や捉え方が異なることだ。ヨーロッパの人々にとってのアメリカの歴史と日本の人々にとってのそれが違うように、その国の政治や文化のありようが反映される。世界各国から見た日本の意義が多様であることと軌を一にして、「日本の近代」は実に多様に捉えられてきた。

筆者はかつて、アメリカとヨーロッパ、そして日本における「日本研究」の違いを論じる機会を得た¹。そこではアメリカの日本研究者 187 名から安倍政権に対する公開書簡が出されたことを入口に、戦後 70 年にわたる政治文化に起因するそれぞれの「日本研究」のすがたを論じた。「アメリカの日本研究」「ヨーロッパの日本研究」「日本の日本研究」にそれぞれのヒストリオグラフィーがあり、それぞれが独自の世界観を持っている。そのことには強みと弱みがあった。

その後、日本政府が掲げる「スーパーグローバル」政策の影響もあってか、日本研究の「国際化」は著しく進んだ。学术交流はかつてなく活性化し、それぞれのヒストリオグラフィーが相互浸透しつつある。それを表すかのように、2018 年には日本はもちろん、世界各地で明治維新をテーマにした国際会議が開催され、多くの研

¹ 清水唯一朗「戦後 70 年目の日本研究—アメリカ、ヨーロッパ、日本」『吉野作造研究』第 12 号（2016 年）。

究が発表された。「日本研究」を取り巻く状況は劇的に変化している。

こうした動きを踏まえ、本稿は、まず明治維新が世界各国の日本研究者によってどのように論じられたのかを明らかにする。そのうえで、これまでそれぞれの地域でそれぞれの文脈において発展してきた「日本研究」が、現在、国際交流の進展によって盛んに交わり、相互参照が進みはじめていることを取り上げ、その現状を検討する。最後にこれらの議論を踏まえて、次の50年、すなわち明治200年に向けた「日本研究」のあり方と、そのために必要となる施策について論じる。

二 日本—顕彰の明治100年（1968）、検証の明治150年（2018）

まず日本の状況を見てみよう。公的には政府が2018年を明治150年と位置付け、10月に行われた記念式典を軸としていくつかの取り組みが行われた²。しかし、50年前の明治100年が高度成長を受けた政治的セレモニーとなったことに比べると、150年のそれはきわめて控えめで、文化的なものであった³。

明治150年が政治的祝祭としての側面をひそめ、文化的事業を主として扱われたことは、国内において明治維新をさまざまに捉えるだけの研究実績が積み上げられてきた成果である。豊饒な研究成果をもとに、明治150年にはこれらの成果を俯瞰的に捉えようとする

² 政府の施策は内閣官房「明治150年ポータル」<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>で一覧することができる。以下、ウェブサイトについては、すべて最終閲覧日2019年9月23日。

³ この点については別稿にまとめ、中国文化大学東亜人文社会科学研究所の日本学研究叢書第1号に収録される予定である。

動きが見られた。

なかでも大きなものは、これまでの近世、近代という枠を超えて、近世—近代の連続性に着目するものである。たとえば江戸時代を専門とする大石学は「近世」を「初めて日本列島規模の国家システムが出来上がった時代」と位置づけた。近年の研究によって、江戸時代にはガバナンスのシステムが徐々に整備されつつあったことが明らかとなっており、これを踏まえて大石は江戸時代を初期近代と捉え、江戸時代＝封建社会という見方から脱却すべき時がきていると論じた⁴。

そうした基盤、とりわけ知的ネットワークの上に公議空間が開け、それによって明治維新が実現したとする議論も近年盛んになっている。なかでも三谷博は薩摩や長州の志士を改革の担い手とする英雄史観を痛烈に批判し、御三家や大大名、先進的な幕臣から政治体制の改革が始まったことを論じている⁵。

公議の思想の普及には挙国一致の要請があった。攘夷という目標を設定すれば、未来に向けての開国や西洋化が受容されたとする奈良勝司の議論は示唆的であろう⁶。革命に際しては二つの極端な概念が切り替えて使われることがあるが、攘夷と開国、復古と革新という要素が明治維新に共存したのは、まさにそうした為政者の現実主義によるものであったと理解できる。

⁴ 大石学「近世」、清水唯一朗「近代」中公新書編集部編『日本史の論点 邪馬台国から象徴天皇制まで』（中央公論新社、2018年）、91～92ページ。なお、同書の繁体字中国語版が中公新書編集部編『日本千年歴史之謎』（遠足文化、2019年）として刊行された。

⁵ 三谷博『維新史再考 公議・王政から集権・脱身分化へ』（NHK出版、2017年）。

⁶ 奈良勝司『明治維新をとらえ直す 非「国民」的アプローチから再考する変革の姿』（有志舎、2018年）、247ページ。

これは明治維新の訳語をめぐる議論にもつながっている。これまで明治維新は王政復古を軸とした **Meiji Restoration** が定訳とされてきた。これは1874年ごろにイギリスの外交官、フランシス・アダムス (Francis Adams) が著した『日本史』が用いたことに端を発すると考えられている⁷。王政復古の大号令に強く影響された語感といえる。三谷や奈良の議論はこの訳語の見直しを迫るものであり、現在、三谷は比較革命史の視点から、明治維新を **Meiji Revolution** と訳すことを提唱している⁸。

しかし、東洋的な「革命」と西洋的な「**Revolution**」の違いにも留意が必要だろう。**Revolution** は、当初ピューリタン革命ののち、名誉革命によって秩序があるべき場所に戻ることを意味したが、フランス革命を経て秩序の大変革を意味する語として用いられるようになった。他方、東洋における革命は言うまでもなく王朝が改まること、すなわち、為政者が入れ替わることを意味している。

すでに指摘したとおり、近年は江戸から明治への強い連続性があること、とりわけ人的な連続性が指摘されている。すなわち、**Revolutionary** な大変革はあったものの、「革命」であるかには疑問が残る。むしろ、現状の研究が示すものは統治構造をめぐるガバナンスの大改革であり、それは革新 (**Innovation**) と呼ぶべきものではないだろうか。

これらの議論が明治維新の到達点を明らかにしていくのに対して、その負の側面に焦点を当てた研究も充実してきていることは

⁷ 荻部直『「維新革命」への道 「文明」を求めた十九世紀日本』(新潮社、2017年)。

⁸ 比較革命史としての明治維新研究には、三浦信孝・福井憲彦編著『フランス革命と明治維新』(白水社、2019年)があり、三浦、福井、三谷による座談会が収録されている。

注目される。大改革の時代が生み出した大きな変化は、政治家や官僚、実業家にとっては躍進の機会であったとしても、民衆にとっては不安に陥り、頑張らなければならない「わな」に陥ってしまう。松沢裕作は、変化と努力を求められる現代と照合しながら、明治維新がもたらした不安と競争という社会のパラドクスを描き出した⁹。

ある歴史上の出来事をできる限り明確に描写しつつ、現代への含意を学ぶという姿勢は、これまでの善悪二元論的な理解を超え、実証主義研究のあるべき姿を明確に描き出している。また、松沢は前著において、自由民権運動に参加したひとびとの行動を、秩序が崩壊するなかでなんらかの紐帯を求める心理から説明している¹⁰。

ひとの弱さに着目するという視点は、松沢のみならず、近年の動向として注目される。江戸の民衆に視点を置き、江戸が東京となる過程における混乱を通じて、体制変化がもたらす敗者の悲劇を記した横山百合子の研究や¹¹、戊辰戦争の敗者のそれからを描く作家の星亮一の議論も同じ線上に位置づけられる¹²。

「他者」に対する視線が広がったことも大きな変化だろう。明治維新の顕彰とバランスを取るかたちで批判する必要性を強調する学会グループは、「創られた明治、創られる明治—明治—一五〇年を考える」と題してシンポジウムを行って、その成果を刊行したが、ここでは政府が明治150年にあたって言及しながらも掘り下げなかった点として「アジア」「ヨーロッパ」「ジェンダー」が取り上げられ

⁹ 松沢裕作『生きづらい明治社会 不安と競争の時代』（岩波書店、2018年）。

¹⁰ 松沢裕作『自由民権運動 「デモクラシー」の夢と挫折』（岩波書店、2016年）。

¹¹ 横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波書店、2018年）。

¹² 星亮一『斗南藩—「朝敵」会津藩士たちの苦難と再起』（中央公論新社、2018年）。

ている¹³。

捉えた方の多様化はより公的な主体において明治150年をどう扱うかという違いにも表れた。政府が祝賀事業を行う一方で、会津若松市など「敗者」は、戊辰戦争を「正義を貫くための戦いであった」として正当性を主張する記念事業を展開したほか¹⁴、北海道では命名150年であることを重視し「未来を展望しながら、互いを認め合う共生の社会を目指」すものと位置づけ、縄文文化やアイヌ文化をはじめとする、近代以前の独自の文化を再評価する事業を展開した¹⁵。

戦後からの復興を背景に先人の偉業を検証した明治100年は、本格的な学術研究として日本の近代が検討される端緒であった。実際、現在参照される研究は、ほとんどが1968年以降の成果である。それから50年の蓄積をもって、明治150年は日本の近代の多様性を描き出す格好の契機となった。政党政治、資本主義、植民地、天皇制という四つの視角から、ヨーロッパ近代をモデルとした日本の近代化における自己目的化した非合理性を説いた三谷太一郎¹⁶、科学技術の発展とその限界を説いた山本義隆¹⁷、近代化を価値

¹³ 日本史研究会・歴史科学協議会・歴史学研究会・歴史教育者協議会編『創られた明治、創られる明治—「明治150年」が問いかけるもの—「明治150年」が問いかけるもの』（岩波書店、2018年）。

¹⁴ 例えば会津若松市は「戊辰150周年記念」と銘打って、戊辰戦争は「正義を貫くための戦い」であったという観点から記念事業を展開した。会津若松市戊辰150周年記念事業実行委員会、<http://boshin.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/>。

¹⁵ 北海道150年事業実行委員会編刊『北海道150年事業記録誌』（2019年）。地方自治体における取組については、大江洋代「戊辰戦争の記憶と地方自治体における『明治一五〇年』」（日本史研究会ほか編、前掲『創られた明治、創られる明治』所収）が詳しい。

¹⁶ 三谷太一郎『日本の近代とは何であったのか』（岩波書店、2017年）。

¹⁷ 山本義隆『近代日本一五〇年』（岩波書店、2018年）。

体系とシステムの変化として捉えた成田龍一などが¹⁸、豊富に蓄積された実証研究を用いて、より大きな視野に立ち、それぞれの視角から日本研究の展望を示して見せた。

実証研究の成果を用いて、より巨視的かつ緻密に日本の近代を論じる動きは、国内に留まられない。代表的な例はアンドリュー・ゴードンの *A Modern History of Japan* であろう¹⁹。同書にゴードンは社会、政治、経済の関係性を複合的に論じる卓越した視野を提供してきたが、第3版においてこれまで以上に豊富な日本語の先行研究、最新の研究動向が参照された²⁰。同氏が教鞭を執るハーバード大学ライシャワー日本研究所には多くの日本人研究者が集まり、近年は日本人大学院生も所属している。研究の相互参照が進んできているといえるだろう。

その意味において、明治150年の年を締めくくる2018年12月に国際日本文化研究センターで行われたシンポジウム「世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」は象徴的であった。この会議は同センターの瀧井一博教授を代表者とする共同研究の取りまとめとして行われたものであり、筆者も3年にわたってこの共同研究に参加してきた。そこでは明治維新を日本国民の歴史としてだけでなく、世界史的な意義を検討し、国際的に発信していくことが目指された。

¹⁸ 成田龍一『近現代日本史との対話 幕末・維新：戦前編』（集英社、2019年）。同『近現代日本史との対話 戦中・戦後：現在編』（集英社、2019年）。

¹⁹ Andrew Gordon, *A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present* (London: Oxford university Press, 2002). 第2版が2009年、第3版が2013年、第4版が2019年に刊行されている。

²⁰ 第3版は日本語にも翻訳され、広く読まれている（アンドリュー・ゴードン〔森谷文昭訳〕『日本の200年 新版』上・下〔みすず書房、2013年〕）。

以下、同シンポジウムでの議論も踏まえながら、アメリカ、ヨーロッパ、アジアにおける明治維新の論じられ方を検討していく。

三 北米—人文科学のなかにおける日本研究とデジタルイゼーション

北米における日本研究が本格化したのは、太平洋戦争中、敵国としての日本を理解するための研究・調査であったことは言うまでもない。その後、占領軍の通訳であったドナルド・キーン (Donald Keene)、駐日大使を務めたエドウィン・ライシャワー (Edwin O. Reischauer) らによって充実した日本研究が進められてきた。しかし、近年、中国の台頭に伴う中国研究の隆盛、韓国コリア・ファンデーションによる積極的な韓国研究への支援、さらには地域研究全般の退潮などによって、北米における日本研究は縮小を余儀なくされている。こうした状況に対する財政支援は、日本への理解を長期的に得ていく観点からも強化していく必要がある²¹。

一方、こうした懸念を払拭するののかのように明治150年に合わせた動きは盛んに進められた。とりわけ目を引くのはイェール大学マクミランセンター東アジア研究委員会、ウェイク・フォレスト大学歴史学科、ハイデルベルク大学グローバルCOE(ドイツ)との共同研究事業「明治維新150周年を記念する」であろう²²。

サムライによる封建体制が倒され、新しい体制が西洋モデルを受

²¹ イギリスの事例であるが、下記の記事は日本研究の現状に警鐘を鳴らすものとして参考になる。「今、ケンブリッジ大学の日本研究が危ない!! ケンブリッジ大学日本研究教授ミカエル・アドルフソン」『GURULI』2019年10月12日、<https://guruli.net/community/508/>。

²² “The 2018 Meiji Restoration Sesquicentennial,” Yale Macmillan Center Council on East Asian Studies, et al., <https://build.zsr.wfu.edu/meijirestoration/>.

容して急速に政治、経済、軍事、宗教に代表される社会構造の改革を進める。その結果、日本はわずか数十年で軍事と経済において西洋諸国に匹敵する国民国家となった。こうした基本認識にたち、このプロジェクトは明治維新研究を活性化させ、新しい解釈を世界に向けて広めていくことを目的と位置付ける。

同プロジェクトはまず、2015年1月にウェイク・フォレスト大学で“The Civil Wars of Japan’s Meiji Restoration & National Reconciliation: Global Historical Perspectives”が開催された²³。セッションは軍備を通じてみた国際関係、文学と視覚、和解の国際比較、戊辰戦争の内観と外観、太平洋をめぐる日米関係、戦後構築など多岐にわたるが、全体として、表象、和解、記憶、比較といった文脈にまとめることができる。これらはいずれも北米の研究者が関心を持ってきたテーマであり、報告者も31名中29名が北米東海岸の大学に籍を置く研究者で占められていた。アメリカにおける日本研究の関心がよく表れたカンファレンスであった。

それに対して同年7月にハイデルベルク大学で行われた第2回目の会議は大きく様相を異にした。会議のタイトルを“Global History and the Meiji Restoration”と銘打ち、初日は“Re-Interpreting History?”と題してグローバルコンテクストのなかでの明治維新、明治日本の国際的視野が論じられ、2日目は“Meiji Restoration and foreign influences in economy and politics”と題して経済、外交、知的交流が、3日目は“The Meiji Restoration as Edo-Meiji Transition in Culture and Society”と題して旧慣打破、

²³ “The Civil Wars of Japan’s Meiji Restoration & National Reconciliation: Global Historical Perspectives,” Wake Forest University Department of History, <https://build.zsr.wfu.edu/meijirestoration/wfu-conference/>.

国家・地方関係が論じられた²⁴。

筆者は以前、アメリカにおける日本研究とヨーロッパにおける日本研究の大きな違いに、日本語に対する立ち位置があると論じた²⁵。アメリカでは、人文科学における対象が広く捉えられ、方法論も進歩していることから、映画や絵画、建築などといったモノへの表象から地域にアプローチすることが許容されている。

また単独の地域のみを対象として論じるのではなく、比較の文脈において検討することが求められる。それは大学の学科編成や大学院での研究者養成の方法にも反映されており、若手の研究者は日本研究者ではなく、東アジア研究者、アジア研究者として養成され、ポストに就いていく傾向がある。また博士候補生となるために研究分野のブックリストを提出し、その内容を理解しているかの口頭試問に合格する必要があるが、英語で書かれた必読文献が膨大に存在しており、これらをリストから外すことができない。このため、日本を対象のひとつとしながらも、日本語を解さない研究者もいる。

それに対してヨーロッパでは、まず日本語を理解することが重視される。ほとんどの学生が学部時代に日本留学を経験しており、諸橋轍次『大漢和辞典』などを引く学部生にも出会うことがある。彼らは早期から日本語の文献にも触れており、日本における研究動向にも詳しい。他方、英語の文献も渉猟しており、両側を知る位置にあるといえる。

こうした傾向を反映して、ハイデルベルクの会議では50名の登

²⁴ “Heidelberg History Conference on ‘Global History and the Meiji Restoration’,” Cluster of Excellence Asia and Europe in a Global Context, <http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/index.php?id=3728>.

²⁵ 清水唯一朗、前掲「戦後70年目の日本研究—アメリカ、ヨーロッパ、日本」。

壇者のうちヨーロッパからの参加者は半数の25名に留まり、アメリカから10名、日本から13名、中東と中国からそれぞれ1名が参加して、ダイバーシティに富んだ構成が取られた。ヨーロッパからの参加者に思想史研究者が多いことも一つの特徴であった。マーク・ラヴィナ (Mark Ravina) が翌年に刊行した単著は、この2回の会議の成果を織り込み、攘夷と開国、復古と進歩といったパラドクスを解明するものとなっている²⁶。

第3回目の会議は2017年9月にイエール大学で行われている²⁷。会議全体のタイトルは“The Meiji Restoration and its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration”であり、江戸から明治への連続・非連続、暴力・トラウマ・迫害、政治と記憶、ジェンダーと性、社会構造変化の概念化と、これまで2回の変化を踏まえながら、アメリカ、ヨーロッパ、日本、それぞれの地域における日本研究の蓄積が豊富に取り入れられたセッションが組まれた。

とりわけ、森と海という空間の変化を扱うセッションが置かれたことは、日本研究が日本研究にとどまらず、人文科学研究の新しい射程を取り入れて、「新しい解釈を世界に向けて広め」るこのプロジェクトの意義を大きく高めるものとなった²⁸。

このプログラムが日米欧における日本研究のマルチ・ヒストリオ

²⁶ Mark Ravina, *To Stand with the Nations of the World: Japan's Meiji Restoration in World History*, (Oxford University Press, October, 2017).

²⁷ “The Meiji Restoration and Its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration,” Yale Macmillan Center Council on East Asian Studies, <https://ceas.yale.edu/meiji150>.

²⁸ このほか、フィラデルフィア大学やデューク大学などでも明治をテーマとした国際ワークショップが開催された。

グラフィーを混ぜ込んでいったのに対して、その多様性を見せることに大きく貢献しているのが、ブリティッシュ・コロンビア大学の“The Meiji at 150 Project”である。このプロジェクトは多角的に研究、教育における明治150年の掘り下げを進め、デジタル教材の開発、ワークショップの実施などを盛んに進めたが、きわめて大きな貢献は実に120本に及ぶポッドキャストの配信である。

現在、第一線で活躍する世界各地の日本研究者に対して、トリストラン・グルノー(Tristan R. Grunow) 准教授が30分程度のインタビューを行う形式で進められる。そのカバーする範囲は明治維新に留まらず、江戸期から第二次世界大戦後まで、政治から言語まで多岐にわたり、現在の日本研究の位置を知ることができる、ある種の研究事典となっている²⁹。120本目となるグルノー氏自身のポッドキャストは、このプロジェクト全体を知るのに有益である。

同氏が最も印象深かったと紹介するのは、第36回のヒロム・ナガハラ(Hiromu Nagahara) MIT 准教授の回である。ナガハラは流行歌の変遷から日本の世相を説き、そうした説明が学生や一般に対してきわめて有効であると説く。筆者は2018年にナガハラ教授が担当するMIT歴史学部のWorld Historyクラスと、筆者が担当する慶應義塾大学SFCの「日本の近現代」で相互乗入型の講義を行ったが、同氏の講義はハーバード大学とMITが構築したデジタル教材“Visualizing Japan”を活用しながら議論を進める魅力的なも

²⁹ 120のエピソードは13のテーマと13のトピックに分類されており、リスナーは自分の興味関心に沿って選ぶことができる。なお、The Meiji Restoration に分類されているのは23エピソードである。“Meiji at 150 Podcast Episode Guide,” The University of British Columbia, <https://meiji150.arts.ubc.ca/podcast/podcast-episode-guide/>.

のであり³⁰、日本側の学生の反応もとても優れたものとなった。

今後、北米からは人文科学を軸とした多様性とデジタルイゼーションによる教育を受けた学生たちが日本研究の世界に入ってくるだろう。前述したように、彼らは日本語のトレーニングよりも分析概念の理解に重点を置いて取り組んできた特徴がある。彼ら彼女らがどのような研究を進めていくのかが期待される。

四 欧州—日本学の多様化と第三の道

欧州における日本研究は、幕末維新期に往来した外交官、研究者を中心に文学、歴史学を端緒に進展し、戦後は政治学や社会学など社会科学の分野でも充実した研究が進められてきた。その全体の状況を捉えるにはヨーロッパ日本研究学会（EAJS: European Association for Japanese Studies）を見るのがいいだろう。EAJS は 1973 年に創設され、3 年に 1 回のペースで大会を行ってきた。2011 年のエストニア大会からは政治経済のセッション群も立ち上がり、人文社会科学を横断する学会となっている。

直近の大会は 2017 年 8 月にリスボン（ポルトガル）で行われた³¹。明治 150 年の 1 年前ということもあったのだろうか、ワークショップでも基調講演でも明治維新は取り上げられず、全体イベントに取り上げられたのは西行法師の生誕 900 年であった。

もちろん、明治維新を扱った研究がなかったわけではないが、それは 150 を数えるセッションのうち 3 つに過ぎない。EAJS は言語

³⁰ “HarvardX MITx, Visualizing Japan,” edX, <https://www.edx.org/xseries/visualizing-japan>.

³¹ “EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies,” Universidade Nova de Lisboa, <http://nomadit.co.uk/eajs/eajs2017/downloads/eajs2017.pdf>.

から環境、芸術、メディア、歴史から政治まで実に幅広い分野を扱い、回を追うごとに人数も増加し、リスボン大会には1,200人を超える参加者があった。多様化する日本研究を代表する場所であり、ここには明治150年というまとめの括りは不要だったようだ。

そうした意味で、ヨーロッパにおける「明治150年」を牽引したのは、上述したハイデルベルク大学での会議であった。同大学ではプロジェクト・リーダーのハラルド・フス (Harald Fuess) 教授に加え、戦前日本の旅券制度を専門とする山本敬洋助教が中心となり、さらなる展開を続けている。2018年11月には、奈良岡聰智京都大学教授と筆者を講師としてゲスト・レクチャー“150 Year Anniversary of the Meiji Restoration”も開かれた³²。

近代研究のうち、歴史分野においては、欧州の大学院に学んで学位を取得する若手研究者が増加傾向にある。LSE (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス) で学位を取得してハイデルベルク大学で教鞭を執る山本氏はその顕著な例であるが、オックスフォード大学ニッサン日本研究所などにも多くの日本人大学院生が学んでいる。日本語による先行研究へのアクセスに慣れている彼らが、日本語での理解を重視する欧州の日本研究大学院に所属していることは、同地の日本研究と日本における日本研究の相互交流、相互参照を進めるうえで、きわめて大きなカギになるだろう。

「スーパーグローバル」大学政策の影響により、日本の大学においても英語で講義を行うことが義務として教員に課されるようにな

³² “Guest lectures: 150 Year Anniversary of the Meiji Restoration,” Cluster of Excellence Asia and Europe in a Global Context, http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/en/newsevents/events/event-view/cal/event/view-list%7Cpage_id-2289/tx_cal_phpicalendar////150_year_anniversary_of_the_meiji_restoration_lectures.html.

り、英語講義の実績が就職に関係するようになってきているという現実的な理由もあるだろうが、自国の歴史を他国において研究することで、より多角的に見る視点を持つことは、日本研究のこれからにとって極めて大きな財産となるだろう。

欧州とアジアのあいだに立つトルコでは、欧州や北米とはやや異なる文脈で日本研究が進んでいる。とりわけ、日本の近代化とトルコの近代化がほぼ並行して進んだことから、比較近代史としての視点が明確に存在している。

トルコでの会議は2018年6月にイスタンブールのボアジチ大学(Boğaziçi University)で行われた。報告はグローバル化とローカライゼーション、人材育成政策、技術発展、基礎科学、鉄道政策、知的財産権ときわめて具体的であり、文理を横断したものであり、欧米における「明治150年」とは一線を画する³³。

そうした意識は“Retrospective and Challenges on the 150th Year Anniversary of the Meiji Restoration”という副題によく表れている。会議を主催した同大学のセルチュク・エセンベル(Selçuk Esenbel)教授は、より実践的に歴史から学ぶこと、文理を横断し「学問のための学問」にならないことが重要であると、この会議の趣旨を説明した。それに呼応するかのように会場の院生、学生からの質問もきわめて具体的であり、150年を俯瞰して捉えながら、日本とトルコの差異から考え抜こうとする姿勢が明確に表れていた。

トルコにおける「明治150年」のあり方は、人文科学のなかで

³³ 報告者6名はいずれも日本人であり、モデレーターと質問者はいずれもトルコ人であった。“A conference on ‘Japan in the Global 21st Century: Retrospectives and Challenges on the 150th Year Anniversary of the Meiji Restoration’,” Asian Studies Center, Boğaziçi University, <https://asya.boun.edu.tr/node/63>.

の日本研究を追求する北米、日本研究の多様化を進める欧州に対する、日本研究の第三の道ということもできるだろう³⁴。

五 アジア—世界史のなかの明治／アジア史のなかの明治

アジアではどうだろうか。台湾における動向は今号所収の楊論文に詳しいのでそちらに譲り、それ以外の地域における動向を見ていく³⁵。ボアジチ大学での会議の翌7月、天津・南開大学日本研究院において国際シンポジウム「明治維新と近代世界」が開催された。基調講演では中国から2名、日本から1名、北米から1名の報告者が、明治維新の世界的インパクト、比較革命論、王道論、経済交流の観点から話題提供を行い、主題報告では日中2名ずつの報告者が統治構造と民主主義、権威の再構築、明治憲法の世界史的意義、国家神道と倫理を論じた。分科会では実に62名の報告が行われた³⁶。日本からは筆者を含め6名が参加した。

印象的であったのは、中国側の報告者の大半が日本留学経験を持ち、その経験を活かしつつ、現在の所属学部との関係から研究テーマを選んで取り組んでいるところであった。その結果、研究テーマはいずれもかつて日本でよく見られたか、中国を頻繁に訪問する日本人研究者の問題関心に近いものになっていた。中国からは日本

³⁴ このほか、2017年9月にロンドン大学東洋アフリカ研究院で“Meiji Japan in Global History”と題したワークショップが実施されている。

³⁵ 楊氏には本号所収の論考のほか、植民地期における台湾の政治運動と明治維新理解を捉えた「1920年代における植民地台湾の政治運動の再考—明治維新解釈の視点から」（『社会システム研究』第25号、2012年）などの研究がある。

³⁶ 「国際シンポジウム『明治維新と近代世界』が南開大学で開催」南開大学日本研究院、<http://www.riyan.nankai.edu.cn/2019/0508/c12958a132480/page.htm>。

のインターネット資源に対するアクセスが限定されており、研究者にとって不利な条件があることを考えれば止むを得ないことだろう³⁷。

この状況を改善するためには、より多様な日本研究者との交流が欠かせない。今回の報告のうち基調講演を中心とした8編は『南開日本研究2018』に収録、公刊されたことは意義があるだろう。

加えて、中国だけではなく、より広い枠組みでの国際交流が求められる。欧州におけるEAJSの取り組みに触発されて、アジアでも2016年から東アジア日本研究者協議会(EACJS: East Asian Consortium of Japanese Studies)が毎年開催されている。「協議会」という名称に現れているように、同会はアジア各国の日本研究機関が自分たちのセッションを持ち寄るかたちで行われ、2016年にソウル、2017年に天津、2018年に京都で開催されてきた。

EAJSに倣ったということがあるのだろうか、2018年10月の京都大会でも明治維新に焦点を当てたセッションは1つしか見られず、他は実に多様である。基調講演、特別講演でも明治150年はテーマとなっていない。2019年は台北で大会が開かれ、実に400人近い東アジアの日本研究者が集まり、80近いセッションが開催される予定だが、明治維新をタイトルに掲げるセッションは3つに留まり、多様性がさらなる広がりを見せている。

もっとも、明治150年にあつた京都大会で明治維新が大きく扱われなかった背景のひとつには、同年12月に開催された前述のシンポジウム「世界史のなかの明治/世界史にとっての明治」が、同じく国際日本文化研究センターをホストとして行われ、役割を果たしたことがあるだろう。

³⁷ 特集「明治維新与近代世界」『南開日本研究2018』(天津人民出版社、2018年)。

この会議では15カ国44名の研究者が登壇した³⁸。これまでに挙げてきた日本、北米、欧州、トルコ、中国に加え、台湾、韓国、インド、ベトナム、インドネシア、エジプト、ニュージーランドからの参加があり、会議のタイトルに相応しい構成となった。セッションも「世界とつながる明治日本」「革命のグローバル史のなかの明治日本」「『文明』国の諸相」「明治の大衆文化」「公共性の変容」「ローカルからの明治史」「世界は明治をどう見たか／見ているか」「国際日本研究の課題としての明治」と、まさに明治150年の集大成となる広がりを持ち、議論も白熱した³⁹。台湾からは国立台北大学の蔡龍保教授が技術官僚の育成と移動という、グローバルな視点での人材移動を論じ、中央研究院近代史研究所の黄自進研究員が孫文と蒋介石を事例に、明治維新の中国革命におけるインパクトを明らかにした。

なかでも耳目を集めたのは、エジプト、ベトナム、中国、インドネシアがどのように明治維新、明治日本を捉えたかに迫った「世界は明治をどう見たか／見ているか」であった。とりわけエジプト、ベトナム、インドネシアでの受け止め方は日本ではほとんど知られておらず、日本の近代化が美化されてそれぞれの国で政治的に用いられてきたことは、それ自体の持つ正負両面を含めて、歴史の波及の持つ可能性と危険性を強く感じさせるものであった。

この体験から筆者は東南アジアにおける明治維新の受け止め方

³⁸ 「第53回国際研究集会 世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」国際日本文化研究センター、http://research.nichibun.ac.jp/pc1/ja/events/archives/intr_kenkyu_shukai/cal/2018/12/14/s001/。

³⁹ 議論の様子は次の記事に詳しい。「『明治維新150年』を日本と世界の知性が徹底討論 有終の美を飾る国際研究集会開催」『産経新聞』2018年12月28日付、<https://www.sankei.com/life/news/181228/lif1812280003-n1.html>。

に強く関心も持ち、このカンファレンスの際に紹介のあったベトナム・ホーチミンでの会議での報告を申し込んだ。会議は 2019 年 3 月にベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学で行われた。明治 150 年を冠した会議としては最後に行われたものだろう⁴⁰。

会議のタイトルは「明治維新とベトナムのドイモイ」とされ、基調講演はドイモイとの比較、人材育成、殖産興業政策と、トルコの場合に似た、より実践的な議論が筆者を含む日本人研究者 4 名とベトナム人研究者 2 名によって行われた。分科会ではベトナム各地から集まった 20 名の研究者が報告したが、それは産業化に重点を置いた実践的なテーマを対象とした研究と、明治維新そのものを扱う学術的な研究に二分された。

興味深かったのは、前者のテーマを扱う者はベトナムで学位を取得した研究者が多く、後者のテーマに取り組む者は日本に留学し、日本で学位を取得している研究者が大半であったことだ。日本留学組が学術的な研究に取り組んでその成果をベトナム語で発信し、ベトナムで学ぶ研究者がそれをういて産業化、近代化へのレッスンを導き出すという分業関係があることが理解できた。

目下、ベトナムでは日本留学熱が高く、同大学でもより高い学費を負担して通常の倍の授業を受けられるクラスが人気を集めているという。同クラスの学生はわずか 1 年しか日本語を学んでいないにも関わらず、日本政治の議論ができるほど精通していた。彼ら彼女らをどう受け入れて、研究を支援していくかは日本研究の大きな課題となっていくだろう。

日韓では、両国間の関係が良好とはいえない中でも、様々なルー

⁴⁰ このほか、2018 年 9 月にはシンガポール国立大学、12 月には東北大学、台湾当代日本研究学会でも明治 150 年を扱った会議が行われた。

トでの学術交流が継続されている。なかでも 2003 年以来続けられてきた日韓学術フォーラムは、大規模な若手研究者の交流として注目される⁴¹。同フォーラムは日本と韓国の大学院で研究する大学院生 200 人が一同に会し、国際政治、政治・法律、歴史、文化、宗教などのセッションに分かれて報告、討論を行うものである。分野ごとにセッションが行われることで、報告者たちはテーマこそ異なるもののディシプリンを共有しており、筆者が運営委員を担当する政治・法律分野では、明確な方法論に依拠したレベルの高い議論が展開されている。

特徴は、報告のみならず、司会、討論、通訳までを大学院生たちが分担して行うことにある。前年以前の報告者がサポートに入り継続的に参加することで、分野ごとの貴重な人間関係が生まれていることは特筆される。大会は日本と韓国で交互に行われており、大学院生たちはその前後に資料調査などのアクティビティを入れて研究の充実を図り、エクスカージョンで他国の研究者たちとの関係を深め、帰国後はオンラインで交流を続けている。日中、日台でも同様の枠組みが見られるが、これだけの規模で、両国関係が決して順調でないときにも続けられていることは、学術交流の範型となるだろう。

六 おわりに：日本研究の課題—明治 200 年に向けて

戦後 70 年を経て、世界各国で行われる日本研究は、それぞれの文脈において発展してきた。その要因は、第一に各国と日本の関係性という制度的基盤、第二に各国における先導的な研究者の問題関

⁴¹ 「日韓次世代学術フォーラム」東西大学校 日本研究センター、http://uni.dongseo.ac.kr/japancenterja/?pCode=japan_ja。

心が継承される研究の経路依存性、第三に利用できる史料、文献が限られているという知的インフラの制約によるものであったと考えられる。それぞれの地域で行われる「日本研究」は、それぞれが独自のヒストリオグラフィーを持って発展してきた。

明治 150 年という節目はこうした割拠状況を克服し、それぞれのヒストリオグラフィーを交換し、その連鎖からそれぞれの「日本研究」のさらなる発展を可能とする知的ネットワークを構築する機会となった。世界各国で開かれた明治 150 年を機とする国際シンポジウムがその機能を果たした。それぞれのヒストリオグラフィーが独立している状況は、明治 150 年を経て「マルチ・ヒストリオグラフィー」ともいえる複合的な段階に進んだといえるだろう。

この状況を生かして、次につなげていくためには何が必要だろうか。第一にはより密接な人的交流が欠かせない。幸い、日本の高等教育・研究期間では「スーパーグローバル」プログラムが高唱され、国際化には重点的に予算が措置される状況になっている。その効果は想像より大きく、EAJS で見てみると 2011 年から 2017 年までの 6 年間で日本人の参加者は 100 名から 400 名と 4 倍になった。EAJS 全体でみても 400 名から 1200 名と 3 倍増と著しい発展を見せている。日本人の日本研究者が積極的に海外に出ていくようになったことは大きな変化といえるだろう。

加えて大きく勇気づけられるのは、アメリカで、ヨーロッパで、アジアで日本研究を進める日本人の若手研究者が増加していることである。本論中でオックスフォード大学の事例を紹介したが、こうした状況はアメリカでも、アジアでも生まれている。きわめて好ましい時代が、果敢に挑戦する若手によってもたらされている。

こうした日本研究の「国際化」の動きは人文科学分野で著しいが、そこには日本語が共通言語として位置づけられているという特

性があるだろう。人文科学分野では、いうまでもなく日本語を習得することが大前提となり、論文も日本語で発表されることが多い。日本語書籍の翻訳も充実している。しかし、翻ってみれば、日本語で理解し、日本語で書くことが大きな参入障壁となっていることも事実であろう。

もちろん、各国で日本研究に関心を持つ学生が、日本語そのものに関心を持つのであればそれでよいだろう。以前、ある学会で日本語教育と日本研究のいずれに予算を用いるべきかというセンシティブな議論が行われた際、ある日本語教授が「自分たちは、学生が多様な関心を持ってもらってもそれに応えることができない」と述べられていた。同時に、社会科学を専門にする日本研究者では、効果のあるかたちで日本語を教授することは難しい。

これに対して社会科学分野では必ずしも深い日本語習得が必須ではない。経済学を先駆として、政治学でも英文ジャーナルに投稿する日本人研究者が増えてきている。ただし、それらの研究では比較のなかの一事例として日本を扱う場合が多く、日本を主たる題材として行われる日本研究は、まだ英語化できていない。それはこの分野における重要な研究がなかなか翻訳されてこなかった状況からも明らかであり、むしろ人文科学よりも発信が弱かったといえるだろう。重大な困難に直面しているのは、この日本を題材とした社会科学だと言える。

これは筆者自身が、各国の日本学専攻で講義、講演をするなかで感じた難しさでもある。学部時代に日本語学科で学んだ学生は、きわめて流暢に日本語を操り、日本語文献にも挑むことができるが、社会科学の概念やモデルの理解に苦勞する。他方、学部時代に何らかの社会科学分野で学んだ学生は、後者の問題はないが、日本語の論文を読むことに想像を絶する苦勞をする。

こうしたなか、各地の大学でダブルメジャー制度を導入する大学が増えてきた。たとえば政治学と日本語のいずれかを主専攻、いずれかを副専攻として学部で学べば、大学院でも相応の進捗が期待できる。筆者の勤務する大学もそのスタイルを取っているが、留学した学生たちは充実した研究生生活を過ごしている。アジアでも同様のカリキュラムで学んだ学生を指導したことがあるが、ディシプリンの共有があるため、言語に若干の問題があっても指導はスムーズに進んだ。

もっとも、ダブルメジャーを求めた結果、中国学と日本学を選ぶといった問題も出てきているようだ。主専攻をディシプリン、副専攻を地域研究にするといった制度化が必要だろう。いずれにせよ、ダブルメジャー制度は、日本研究のみならず、地域研究の再生に欠かせない手法だと考える。

もう一点、海外からの資料アクセスを容易にすることは、これまで以上に重要になってきている。2001年にアジア歴史資料センターが開設され、インターネット上で多くの一次資料の閲覧が可能となったことを皮切りに、2002年には国立国会図書館近代デジタルライブラリーが音声や画像も含めた公開をはじめ⁴²、国立公文書館デジタルアーカイブ、国会会議録検索システムなどが整備された。地方の図書館、公文書館などでもデジタル公開が徐々に進んでいる。資料アクセスの状況は大幅に改善している。

問題となるのは、学術論文である。上述の問題とも関連するが、特に社会科学分野の日本語ジャーナルの公開が遅れていた。ようやく今年（2019年）1月、日本政治学会の『年報政治学』の2015年分までが独立行政法人科学技術振興機構が運営するJ-STAGE

⁴² 2016年に国立国会図書館デジタルコレクションに統合されている。

で公開された。同学会でも英文誌『Japanese Political Science Review』は電子版で発行されるなど改革が進んでおり、和文誌についても即時利用への期待が高まる。

人文科学分野でも、歴史分野の主要学術誌である史学会『史学雑誌』の電子配信が、2017年からJ-STAGEで始まっている。画期的なことであるが、なぜか各年の第5号として刊行される「回顧と展望」だけが除外されている。これは各年の研究状況を網羅的に集め、第一線の研究者が論じるものであり、こうした文献こそ電子化されて広く公開されるべきものであろう。

社会科学分野における英語による発信も、政府による翻訳事業などの取り組みが進み始めている。日本を題材とする社会科学研究に取り組む若手研究者たちは、盛んに国際学会で報告し、英語論文を刊行している。継続されるべき取り組みであろう。

明治150年は、日本研究のそれぞれのヒストリオグラフィーを複合させる契機となった。50年後、明治200年がどのような状況になるか。ダブル・メジャー制度を活用した人文科学と社会科学を融合した日本研究の展開、一次資料のさらなる電子化、主要ジャーナルの自動公衆送信、重要研究の翻訳出版など、波及効果を意識した取り組みがさらに継続、発展されていくことが欠かせない。

(寄稿：2019年9月23日、採用：2019年11月4日)

日本研究的多史學

—從自力更生到共同合作的時代—

清水唯一朗

(慶應義塾大學綜合政策學部教授)

【摘要】

即使同為日本研究，因進行研究的所在區域差異，對問題意識的關注、研究主題和對象，以及所運用的方法也會有所不同。自第二次世界大戰結束後歷經 75 年，美國有美國的、歐洲有歐洲的、亞洲有亞洲的「日本研究」，皆擁有和發展出各自的史學觀。當然，日本也不例外。然而，從日本的例子可明顯看出，上述每個皆各自獨立發展，相互參考引用的僅限於被翻譯的一小部分。

從這樣的意義上來看，2018 年可謂「日本研究」的劃時代年份。在明治維新 150 年後此一具有里程碑意義的年份，不僅在日本，還在美國、歐洲、亞洲等眾多地方皆舉行了以明治維新和日本近代化為主題的國際會議。隨著多樣的史學觀開始正式確實地相互參照，新的可能性便出現開端。為此，有必要穩定地繼續發展促進相互交流的基礎平台作業。

關鍵字：日本研究、日本學、國際化、國際共同研究

The Multi-Historiography of Japanese Studies: From an Era of Self-Reliance towards an Era of Collaboration

Yuichiro Shimizu

Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

【Abstract】

Even Japanese Studies, depending on the region where research is conducted, differs in terms of problem, research subject and methods utilized. In the seventy-five years since the end of the Asia-Pacific War, the United States, Europe and Asia each developed their own ‘Japanese studies’ with their own unique historiographies. Of course, Japan is no different. However as is clear from Japan’s example, each of them developed independently, and cross referencing was limited to the small parts which had been translated.

In this sense 2018 was a moment of transition in Japanese Studies. In the year of the 150th anniversary of Meiji, international conferences were held not only in Japan but also in the United States and throughout Europe, Asia and many other regions on the theme of the Meiji restoration and Japanese modernization. New possibilities are beginning to emerge as a diverse historiography begins to cross references in earnest. To this end, further infrastructure development is essential.

Keywords: Japan Studies, Japanese Studies, Japanology,
Internationalization, International collaboration

〈参考文献〉

- 「会津若松市戊辰 150 周年記念事業『義』の想い つなげ未来へー。戊辰 150 周年」
会津若松市戊辰 150 周年記念事業実行委員会、<http://boshin.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/>。
- “Aizu wakamatsu shi boshin 150 shunen kinen jigyo, ‘gi’ no omoi tsunage mirai eー, boshin 150 shunen” [150th Anniversary of Aizuwakamatsu City Business. The Thought of “Righteous,” and Connection to the Future. The 150th Anniversary of Boshin], Aizuwakamatsu Boshin 150-Year Business Commemoration Execution Committee.
- 「今、ケンブリッジ大学の日本研究が危ない!! ケンブリッジ大学日本研究教授ミカエル・アドルフソン」『GURULI』2019 年 10 月 12 日、<https://guruli.net/community/508/>。
- “Ima kemburiji daigaku no nihon kenkyu ga abunai!? ‘kemburiji daigaku nihon kenkyu kyoju mikaeru adorufuson” [Is the Japan Studies at Cambridge University in Danger now? “Cambridge University Prof. Mikael Adolphson of Japan Studies”], *GURULI*, October 12, 2019.
- 「国際シンポジウム『明治維新と近代世界』が南開大学で開催」南開大学日本研究院、<http://www.riyan.nankai.edu.cn/2019/0508/c12958a132480/page.htm>。
- “Kokusai shinpojiumu ‘meiji ishin to kindai sekai’ ga nankai daigaku de kaisai” [International Conference on “Meiji Restoration and the Modern World” held at Nankai University], Japan Institute of Nankai University, China.
- 「第 53 回国際研究集会 世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」国際日本文化研究センター、http://research.nichibun.ac.jp/pc1/ja/events/archives/intr_kenkyu_shukai/cal/2018/12/14/s001/。
- “Dai 53 kai kokusai kenkyu shukai, sekaishi no naka no meiji/sekaishi ni totte no meiji” [The 53rd International Research Meeting. Meiji in the World History/Meiji for the World History], International Research Center for Japanese Studies, Japan.
- 「日韓次世代学術フォーラム」東西大学校 日本研究センター、http://uni.dongseo.ac.kr/japancenterja/?pCode=japan_ja。
- “Nikkan jisedai gakujutsu fuoramu” [Japan-Korea Next Generation Academic Forum], The Japan Center Dongseo University, Korea.
- 「明治 150 年ポータル」内閣官房、<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>。
- “Meiji 150 nen potaru” [Portal of 150-Year Meiji], Cabinet Secretariat, Japan.
- 「『明治維新 150 年』を日本と世界の知性が徹底討論 有終の美を飾る国際研究集会開催」『産経新聞』2018 年 12 月 28 日、<https://www.sankei.com/life/news/181228/lif1812280003-n1.html>。
- “‘Meijiishin 150 nen’ wo nihon to sekai no chisei ga tettei toron, yushu no bi wo kazaru kokusai kenkyu shukai kaisai” [Intellect and Thorough Discussions of Japan and the World

- on “150 Years of Meiji Restoration.” The Decorated International Research Conference with Endless Beauty], *The Sankei Shimbun*, December 28, 2018.
- 大石学「近世」中公新書編集部編『日本史の論点 邪馬台国から象徴天皇制まで』（中央公論新社、2018年）。
- Oishi, Manabu, “Kinsei” [Modern Times], Editorial Board of Chuko shinsho, ed., *Nihonshi no ronten: yamataikoku kara shocho tennosei made [Issues of Japanese History: From the Yamataikoku to the Symbolic Emperor System]*, Chuokoron Shinsha, 2018.
- 大江洋代「戊辰戦争の記憶と地方自治体における『明治一五〇年』」日本史研究会ほか編『創られた明治、創られる明治—「明治150年」が問いかけるもの』（岩波書店、2018年）。
- Oe, Hiroyo, “Boshin senso no kioku to chiho jichitai ni okeru ‘meiji hyakugoju nen’” [Memories of Boshin War and in the Local Government of “150 Years of Meiji”], The Japanese Society for Historical Studies, et al. eds., *Tsukurareta meiji, tsukurareru meiji—‘meiji 150 nen’ ga toikakeru mono [Meiji was Created, and Meiji Created: What did “150 Years of Meiji” ask us?]*, Iwanami Shoten, 2018.
- ゴードン, アンドリュー(森谷文昭訳)『日本の200年 新版』上・下(みすず書房、2013年)。
- Gordon, Andrew, trans by Moriya, fumiaki, *Nihon no 200 nen, shinban [A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present]*, Misuzu Shobo, 2013.
- 荻部直『「維新革命」への道 「文明」を求めた十九世紀日本』（新潮社、2017年）。
- Karube, Tadashi, *‘Ishin kakumei’ eno michi, ‘bunmei’ wo motometa jukyuseiki nihon [The Path of “Revolution of Meiji Restoration:” Japan’s Pursuing of “Civilization” in the 19th Century]*, Shinchosha, 2017.
- 清水唯一朗「戦後70年目の日本研究—アメリカ、ヨーロッパ、日本」『吉野作造研究』第12号(2016年)。
- Shimizu, Yuichiro, “Sengo 70 nenme no nihonkenkyu—amerika yoroppa nihon” [Japan Studies after the End of the War: the U.S, Europe, and Japan], *Yoshino sakuzo kenkyu [Bulletin of studies of Yoshino Sakuzo]*, Vol.12, 2016.
- 清水唯一朗「近代」中公新書編集部編『日本史の論点 邪馬台国から象徴天皇制まで』（中央公論新社、2018年）。
- Shimizu, Yuichiro, “Kindai” [Modern Times], Editorial Board of Chuko shinsho, ed., *Nihonshi no ronten: yamataikoku kara shocho tennosei made [Issues of Japanese History: From the Yamataikoku to the Symbolic Emperor System]*, Chuokoron Shinsha, 2018.
- 奈良勝司『明治維新をとらえ直す 非「国民」的アプローチから再考する変革の姿』（有志舎、2018年）。
- Nara, Katsuji, *Meiji ishin wo toraenaosu, hi ‘kokumin’ teki apurochi kara saiko suru henkaku no sugata [Recapturing the Meiji Restoration: from a “non-citizen” Approach to Rethinking the Changes]*, Yushisha, 2018.
- 成田龍一『近現代日本史との対話 幕末・維新：戦前編』（集英社、2019年）。

- Narita, Ryuichi, *Kingendai nihonshi tonon taiwa, bakumatsu, ishin: senzen hen [Dialogues of Japanese Modern History, the Period of Latter Edo and Meiji Restoration: Pre-War Part]*, Shueisha, 2019.
- 成田龍一『近現代日本史との対話 戦中・戦後：現在編』（集英社、2019年）。
- Narita, Ryuichi, *Kingendai nihonshi tonon taiwa, senchu, sengo: genzaihen [Dialogues of Japanese Modern History, the Period of During and After the War: Present Part]*, Shueisha, 2019.
- 日本史研究会・歴史科学協議会・歴史学研究会・歴史教育者協議会編『創られた明治、創られる明治—「明治150年」が問いかけるもの』（岩波書店、2018年）。
- The Japanese society for Historical Studies, Association of Historical Science, Historical Science Society of Japan, History Educationalist Conference of Japan, eds., *Tsukurareta meiji, tsukurareru meiji—'meiji 150 nen' ga toikakeru mono [Meiji was Created, and Meiji Created: What did "150 Years of Meiji" ask us?]*, Iwanami Shoten, 2018.
- 星亮一『斗南藩—「朝敵」会津藩士たちの苦難と再起』（中央公論新社、2018年）。
- Hoshi, Ryoichi, *Tonamihan—'choteki' aizu hanshi tachi no kunan to saiki [Tonami Domain: the Hardship and Restoration of Feudal Retainers of the Aizu Clan, "the Emperor's Enemies"]*, Chuokoron Shinsha, 2018.
- 北海道150年事業実行委員会『北海道150年事業記録誌』（2019年）。
- Hokkaido 150-Year Business Execution Committee, *Hokkaido 150 nen jigyo kiroku shi [150-Year of Hokkaido's Business Record]*, 2019.
- 松沢裕作『生きづらい明治社会 不安と競争の時代』（岩波書店、2018年）。
- Matsuzawa, Yusaku, *Ikizurai meiji shakai, fuan to kyoso no jidai [Meiji Society is Hard to Live: the Time of Anxiety and Competition]*, Iwanami Shoten, 2018.
- 松沢裕作『自由民権運動 「デモクラシー」の夢と挫折』（岩波書店、2016年）。
- Matsuzawa, Yusaku, *Jiyu minken undo, 'demokurashi' no yume to zasetsu [Freedom and Civil Right Movement: Dreams and Setbacks of "Democracy"]*, Iwanami Shoten, 2018.
- 三浦信孝・福井憲彦編著『フランス革命と明治維新』（白水社、2019年）。
- Miura, Nobutaka, Fukui, Norihiko, *Furansu kakumei to meiji ishin [French Revaluation and Meiji Restoration]*, Hakusuisha, 2019.
- 三谷太一郎『日本の近代とは何であったのか』（岩波書店、2017年）。
- Mitani, Taichiro, *Nihon no kindai toha nande atta noka [What was Japanese Modernity?]*, Iwanami Shoten, 2017.
- 三谷博『維新史再考 公議・王政から集権・脱身分化へ』（NHK出版、2017年）。
- Mitani, Hiroshi, *Ishinshi saiko kogi osei kara shuken datsumibunka e [Rethinking on the History of Meiji Restoration, From Public Opinion/Monarchy to Centralization/De-identification]*, NHK Publishing, 2017.
- 山本義隆『近代日本一五〇年』（岩波書店、2018年）。
- Yamamoto, Yoshitaka, *Kindai nihon hyakugoju nen [150 Years of Modern Japan]*, Iwanami Shoten, 2018.

- 楊素霞「1920年代における植民地台湾の政治運動の再考—明治維新解釈の視点から」『社会システム研究』第25号、2012年。
- Yang, Su-hsia, “1920 nendai ni okeru shokuminchi taiwan no seizhi undo no saiko: meijiishin kaishaku no shitenkara” [Rethinking of the Political Movement in Colonial Taiwan in the 1920s: From the Perspective of Interpretations on the Meiji Reforms], *Social System Studies*, No.25, 2012.
- 横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波書店、2018年）。
- Yokoyama, Yuriko, *Edo tokyo no meiji ishin [Meiji Restoration and the Edo Tokyo]*, Iwanami Shoten, 2018.
- 「明治維新與近代世界」『南開日本研究2018』（天津人民出版社、2018年）。
- “Mingzhi weixin yu jindai shijie” [Meiji Restoration and the Modern World] *Nankai Japan Studies 2018*, Tianjin Renmin Press, 2018.
- “A conference on ‘Japan in the Global 21st Century: Retrospectives and Challenges on the 150th Year Anniversary of the Meiji Restoration’,” Asian Studies Center, Bo aziçi University, Turkey, <https://asya.boun.edu.tr/node/63>.
- “EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies,” Universidade Nova de Lisboa, Spain, <http://nomadit.co.uk/eajs/eajs2017/downloads/eajs2017.pdf>.
- “Guest lectures: 150 Year Anniversary of the Meiji Restoration,” Cluster of Excellence Asia and Europe in a Global Context, Heidelberg University, Germany, http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/en/newsevents/events/event-view/cal/event/view-list%7Cpage_id-2289/tx_cal_phpicalendar////150_year_anniversary_of_the_meiji_restoration_lectures.html.
- “HarvardX MITx, Visualizing Japan,” edX, USA, <https://www.edx.org/xseries/visualizing-japan>.
- “Heidelberg History Conference on ‘Global History and the Meiji Restoration’,” Cluster of Excellence Asia and Europe in a Global Context, Heidelberg University, Germany, <http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/index.php?id=3728>.
- “Meiji at 150 Podcast Episode Guide,” The University of British Columbia, Canada, <https://meiji150.arts.ubc.ca/podcast/podcast-episode-guide/>.
- “The 2018 Meiji Restoration Sesquicentennial,” Yale Macmillan Center Council on East Asian Studies, et al., USA, <https://build.zsr.wfu.edu/meijirestoration/>.
- “The Civil Wars of Japan’s Meiji Restoration & National Reconciliation: Global Historical Perspectives,” Wake Forest University Department of History, USA, <https://build.zsr.wfu.edu/meijirestoration/wfu-conference/>.
- “The Meiji Restoration and Its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration,” Yale Macmillan Center Council on East Asian Studies, USA, <https://ceas.yale.edu/meiji150>.
- Gordon, Andrew, *A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present* (London: Oxford university Press, 2002).
- Ravina, Mark, *To Stand with the Nations of the World: Japan’s Meiji Restoration in World History*, (Oxford University Press, October, 2017).

